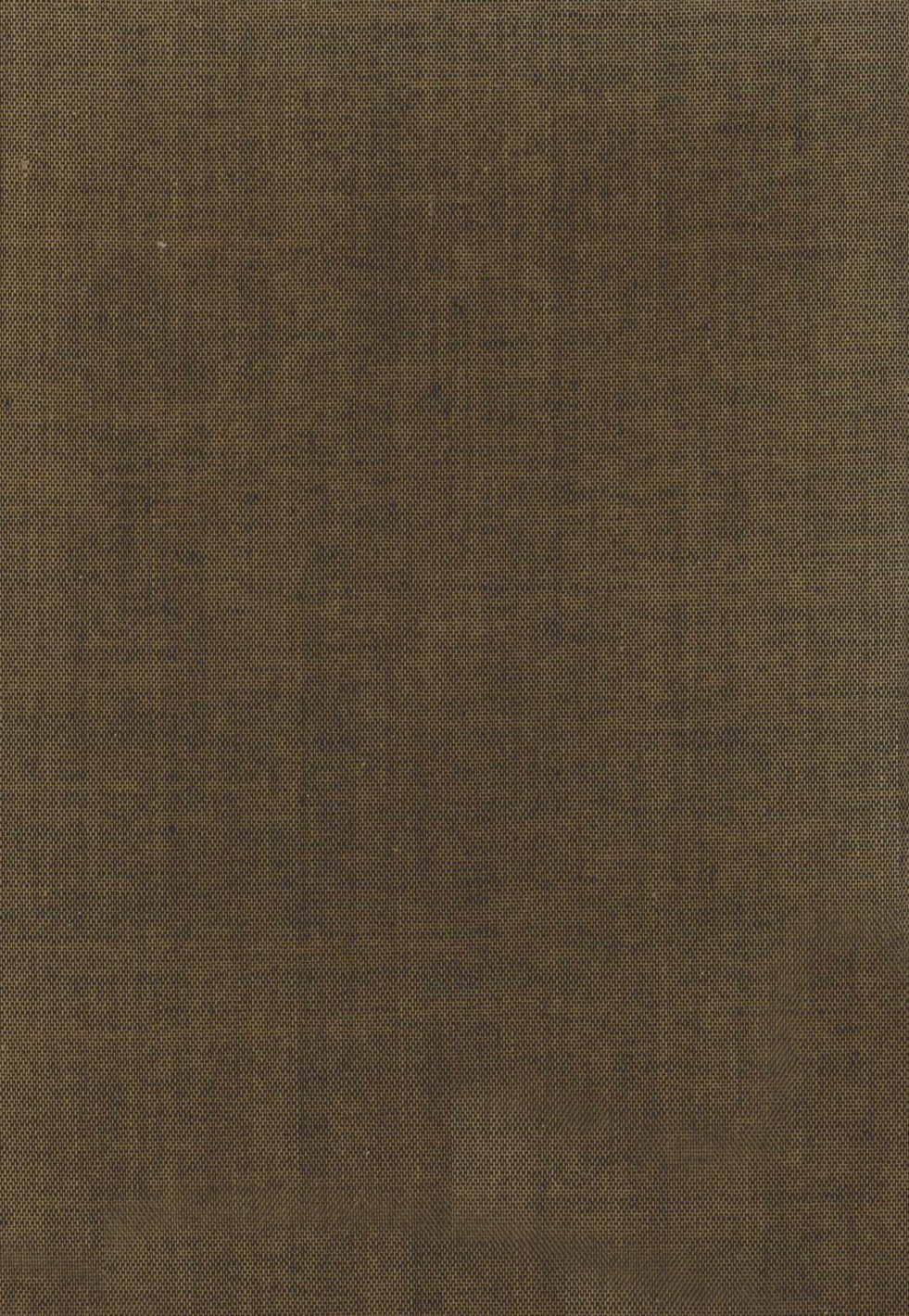
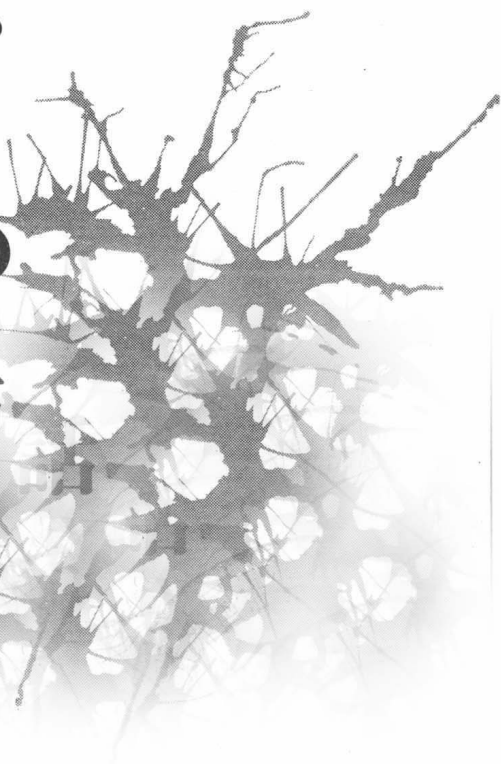




精神病院記

なじい壁との対話

■ 上田都史 著
刀江書院





むなしい壁との対話

―わが精神病院記―

定価八〇〇円

昭和四四年十月三〇日 発行

著者 上田都史
発行者 高山洋吉
印刷者 山森忠一

発行所 株式会社 刀江書院

東京都千代田区神田神保町三ノ一〇ノ一
振替東京一八三一〇六

まえがき

ここに書き記した手記は、ある時代の日本という国の精神病院の一つの姿である。

進行麻痺のマネーやモーパッサンはみごとな絵画と、すぐれた小説をのこした。デカルトは目に見えぬものから真理の探求を促がされ、シューマンは、ベートオベンとメンデルスゾーンとが墓から出て来て作曲を口述したと信じた。ボードレールも、ドストエフスキも、ニーチェも精神病者であった。

されば、「精神錯乱」は決して疾病ではない、反ってこれは、神から授かる甚だ大いなる恩恵であるかもしれない。しかし、彼等天才と同じ系統に属しながら、神からの大いなる恩恵から見はなされた多くの精神病者こそ、ここでは問題なのである。

わが国の精神衛生のはじまりは古く、「大宝律令」の「医疾令」の中に「癪狂」の文字が見える。「癪」は癪癪てんかんであり、「狂」は精神病である。

一五世紀のヨーロッパでは魔女焚刑の焰が全欧の空を焦した。魔女は悪魔が人間と契約した

ものではない。悪魔は人間の思考となんのかかわりあいがある。一五一五年北ブラバンドのマーヌ河畔に生れたヨハン・ワイヤアは、宗教裁判の名によって迫害と処刑をほしいままにした無智な僧侶たちに、巫女や物憑きの処理は医学者の手に委ねよ。精神錯乱は悪魔とはなんの関係もない！ と叫んだ。

昨日は魔女として焚刑に処し、今日は病める者として扱う。ここには異常に対する厳しきがある。ヨーロッパの精神病院は、この厳しい考え方の中で定着した。それにひきかえ、日本の精神病院にはこのような伝統はなく、早くも一〇六九年、京都岩倉の大雲寺の宿坊に、人皇七一代後三条天皇の第三皇女佳子内親王をこもらし、脳病の治療を施したことが伝えられている。

家庭看護、寺院における治療、治療所、収容施設、癲狂院、そして、今日の精神病院へと発展して来た日本の精神病院には、ヨーロッパにおけるような基盤はなく、異常者に対する厳しいわけへだてはほとんどなかった。

精神病院の経営者と精神病患者とは、いわば醇風美俗というすこぶる曖昧な、そして、惨酷なものの上に関係づけられた。私立精神病院に起る不祥事件の根源的な発想はここにあると思う。

一九六四年、ライシャワー米大使の刺傷事件が起ったが、精神障害者による事件が起る度

に、新聞は精神病者の野放しと、精神病床その他の不足を判で押したように繰り返す。これも声を大きくして云わねばならぬことではあるが、重大なことは、立派な病院に収容されている精神病患者たちが、ほとんど医療らしい医療も施されず、その病院内で野放しにされているとするなら、そして、もし、便宜的に入退院がさせられるとするなら、ここには、さまざまな由々しい問題が含まれているのではないか。

精神に異常があるということは甚だ不幸である。精神病患者は自己の思いを訴えることができないし、訴え得たとしても、正常でないということによって、意識的にさえそれをしりぞけることができる。

異常であるからこそ、正常といわれるものがその不幸を、正常に扱わねばならぬのに、それを異常に扱うことができるという極めて奇妙な関係において、あらゆる科の医師のうちで、精神科の医師ほど、いっそう、高いモラルと、いっそう豊かなヒューマニズムが要請される医師は、ほかにない、と、いっても過言ではないと考える。

ところが、この奇妙な関係は、しばしば、虚妄の医療を成り立たせる。それは、赦してはならないことだ。

私はゆくりなく、ある精神病院に事務長として長く勤めた。そこで、私はまことに稀有な経験をした。そして、この病院は愚かなる壊滅カタストロフに類した。その時、世間は事務長である私の責

任を問ひ責めた。

私は独りの人間の力というものが、いかにも弱く哀しいものであることを回想することしかできない。

私は今更、誰に証を立てようとしてもしない。ただ、日本のある時代の私立精神病院が、主体でなければならぬ医療を醜い手段にもちいた事実を歴史の上に書きとめて置きたい。

そして、「物」でないたくさんの貴い生命について誰が責任を問われ、誰が神に赦しを乞うのか。と、問いただしたい。最早、それは事務長というかりそめの職責の権限外である。

もし、この貧しい手記が私立精神病院にとってタブーの書であり、それ故に渴仰の書であるなら、喜びこれに過ぐるものはない。

この書なるについて、なみなみならぬ御厚意をいただいた北野民夫氏、刀江書院代表取締役高山洋吉氏、校正その他の技術面でお世話になった瀬戸口忍氏に、ここからなる感謝の意を表したい。

一九六九年小夏

天禄書屋にて

上田都史

目

次

まえがき

愛と誠実

私はこんな悪夢を見た 一〇

精神科の医師とは 二〇

魂への接近 元

不幸な情況を想定しよう 三〇

経験と体験

脳、この素晴しきもの 五〇

新橋駅前ビル五階 六〇

耳はつんば目はめくらである 七〇

天の声 八〇

善と悪

人を迎える礼儀 九〇

匙は投げられた 一〇〇

シジフォスの神話 一一〇

深層における革命 一二〇

野心と思惑

巨頭会談 一三三

作らなかつた名刺 一四一

金曜日の十三日 一五〇

新しい葡萄酒・新しい革袋 一五〇

心情と情誼

私は敵であつた 一七〇

何処へ行く クオ・ヴァ・ダイス 一八〇

駱駝が針の穴を通る 一七〇

決められた座標 二〇六

背徳と荒廃

復活 二六六

初心からの韜晦 二六六

失われた三つの柱 二七三

終曲の中の序曲 二八二

三顧之礼 二八五

愛
と
誠
実

私はこんな悪夢を見た

アルバート・シュワイツァー博士は、人道精神の昂揚と、そのために医師の負うべき役割とを課題の一つとして取り上げた日本医学会へのメッセージの中で、

「生命の維持に力をつくすわれわれ医師は、人々に生命の尊厳を教え、またこのことによって人類を精神的、倫理的に一層高めるべき特別の使命を帯びている。」

と、医師たるものの志操のあり方を端的に述べている。

云うまでもないことであるが、精神科の医師もこの例外ではなく、医療および保健指導をおこない、精神病者の健康な生活を取り戻すことをもって、本分とするものであろう。

精神に異常があるということは、対人関係において致命的な弱点である。精神病者は自己の思いを訴えることができないし、訴えたとしても、正常でないということによって、それを意識的にさえしりぞけることができる。

異常であるからこそ、正常といわれる者が、正常に扱われねばならぬ精神病者を異常に扱うこ

とができるという、極めて奇妙な関係において、あらゆる科の医師のうちで、精神科の医師ほど、いっそう高いモラルといっそう豊かなヒューマニズムが要請される医師は、ほかにないといつても過言ではない。

ところが、この奇妙な関係は、ときに不幸なはずらをして精神科の医師を、救い難い陥穽に転落させてしまう。人間の哀しさとは、まことに悲しいものである。

*

真夏の太陽がジリジリ照りつける八月のある日、重いリュック・サックを背負い、両手にもなにか風呂敷包を提^さげて、ここは江東のゼロメートル地帯であろうか、私は、就職先の鉄工所へ急いでいた。

昔、玉の井という私娼街があつて小さな家が廂を接して群がり、じめじめした、何処かへ抜けられる細い道が縦横に走っていた。そんな暗く貧しい風景を想い浮べながら、このへんとしては大きな家の、ガランとした鉄工所の前に出た。

まず、二つの風呂敷包と重いリュックを下ろし、なにはともあれ流れるような汗を拭いた。眼に入るものはすべて黒く赤く錆^{さび}ついていて、ドリルで削った鉄屑だけが真夏の太陽にキラキラ光っていた。

上半身裸体の鋼鉄のような肌をした大きな男が出て来て、「こっちへ来い」と、嘸鳴るように云った。

彼の優位と私の劣位は最早、歴然たるものがあつた。彼はつづけて、

「お前に今日から雇人たちの監督をして貰う。従業員どもはみんな泥棒同然だからなア。」と、吐き出すように云った。

こう云つた彼の眼と視線が会つたとき、私は忽ち、真黒な眩暈に襲われた。その暗黒の中で鉄屑だけがギラギラ光つた。そして、こんな所へ就職してくるのではなかつた。と、思ったが、私の行先はどこにもなかつた。

突然、大きな拳銃の音が耳を劈いた。私はアラビヤ人を撃つた。アラビヤ人はのけ反り、血まみれになつて斃れた。

そこは、紺碧の海と灼きつくような砂のアルジェの海岸であつた。私は「異邦人」のムルソ一になつてゐた。そして、アラビヤ人を殺害したのは「太陽のせいだ!」と叫んだ。

私は息苦しくなり、大きく息を弾ませ寝返りを打つた。そして、口をもぐもぐ動かし、「不条理の人間は取り囲まれた人間である。」などと、ぶつぶつ寝言を云つた。

これは、長い、そして悪い夢であつた。

私がこのような夢を見たのは、異常と正常との奇妙な関係の中に「取り囲まれた人間」として、また、ペストの大流行したオランの町の市民のように、世間との繋りを断ち切れ、むなしい「壁との対話」をつづけなければならなかった私の、さまざまな知覚と記憶、そして、われも人も人間でありたいという心の深層に燃えていた願望と、それを、無視し通そうとした恐怖とが、この夢となって形造られたのであろう。

夢とは、もともと非理論的なものであり、非社会的な性質の強いものである。

フロイトによれば、悪夢は夢が、その任務を充分に果すことができないために生れるのだそうであるから。この夢は、私の知覚と記憶と願望と恐怖を、正確に伝え得たものでないかもしれない。

私は、アラビア人をムルソーになって殺害した。そして「太陽のせいだ！」と叫んだ。

それから、寝返りを打ち、寝言を云って、また、深い眠りに落ちた。

「眠ることは無関心になることである。」と、ベルグソンが云った。

その無関心な中に限りなく広がっていった夢を、先へ先へと、私は逐うように、なにかに促されている。

繰り返し云うようであるが、夢とは不たしかなものである。外界との断絶によって、覚めている者の共通の世界から、ただ一人の世界へ退いている。

その静かなる独りの世界から、展け行く私の夢を書き継いでゆきたい。

それは、心の深層に燃えている私の願望であり、しんい願望の焰ほむらなのである。

そして、必要なことは、この願望や願望が、決して特定の一つの病院、数人の医師、数百人の精神病者、あるいは、特定の行政庁だけを対象としたものでない、と、いうことである。

私の願望と願望は、翼をもって遙に高く飛翔している。

もし、このことが解らず、私がここに書き綴ろうとすることを卑俗な怨うらみつらみぐらいにしか受取ることのできない人は、私の遙かなる魂の飛翔をとらえることのできない人だ。

デカルトは、眼に見えぬ者がしきりと真理の探求を促したと信じ、ルソーは、激しい追跡妄想のただ中に『懺悔録』を書いたのである。フローベルは、彼の描く人物が彼を捉えて責める。と、云っている。

「天井に上げられたランプの動揺。または、リンゴの墜落は、ガリレオとニュートンに大発見の暗示を与えた。鉄瓶の沸えたっている湯は、ワットに蒸気の観念を暗示した。同様にある感覚が恐るべき狂的行為の導火線になることがある。」

天才はてんかん癲癇か神経症であるというチェザレ・ロンブロオゾオの命題は、あまりにも素朴で粗雑だという今日の批判にもかかわらず、ガリレオやニュートンやワットに関する限り、私はい